

「徐福」考

國 金 海 二

(一)
不老長寿を願うのは、古今東西、身分の上下を問わず人類のいつわらざる悲願であるにちがいない。特に孤独な独裁者にとつては、それは願以上のものであつたらう。

中国、秦の始皇帝（前二五九—前二一〇）も例外ではなかった。帝が齊（山東省）の方士、徐福（徐市^ツとも）に命じて東海上の三神山に仙人や不老不死の仙薬を求めさせた話は有名であり、司馬遷（前一四五？—前八六？）の『史記』秦始皇本紀には次のように記されている。（以下、詩以外は書き下し文のみ）

齊人徐市等上書シテ言フ「海中ニ三神山有リ、名ヅケテ蓬萊・方丈・瀛洲ト曰フ。僊人之ニ居ル。請フ齋戒シテ童男女ト与ニ之ヲ求ムルコトヲ得ン」ト。是ニ於テ徐市ヲシテ童男女数千人ヲ発シ、海ニ入りテ僊人ヲ求メシム。（二十八八年）

しかし、仙薬などは手に入れられるはずはなく

徐市等ハ費スコト巨万ヲ以テ計フレドモ、終ニ薬ヲ得ズ。（三十五年）

という結果になり、始皇帝は大いに怒つた。そしてその翌々年の記事には、徐福は責められることを恐れて次のような詐りの申し開きをしていることが記載されている。

方士徐市等、海ニ入りテ神薬ヲ求メ、数歳ナレドモ得ズ。費多シ。譏メラレンコトヲ恐レ、乃チ詐リテ曰ク「蓬萊ノ薬得ベシ。然レドモ常ニ大鯨魚ニ苦シメラル。故ニ至ルヲ得ズ。願ハクハ善ク射ルモノヲ請ヒテ与ニ俱ニセン。見レナバ則チ連弩ヲ以テ之ヲ射ン」ト。（三十七年）

これは始皇帝が沙丘（河北省）の平台宮で死んだ年（前二一〇）と同年の記事の中にあり、それによると始皇帝は自ら大鯨魚の征伐に出かけ之を（齊・山東省）でその一頭を射殺すが、その後間もなく病氣となり五十年の生涯を終るのである。徐福のその後については何も書かれていない。

しかし『史記』淮南衡山王列伝には、徐福がたくみに始皇帝をあざむき、蓬萊山中の大神に献ずるといつわって貢物を手に入れて海を渡り、平原広沢のある島にたどりつき、その王となって還つて

来なかつたと次のように記している。

(秦始皇帝) 徐福ヲシテ海ニ入り神異ノ物ヲ求メシム。還リテ偽辭ヲ為シテ曰ク「臣海中ノ大神ニ見ユ。言ヒテ曰ク『汝ハ西皇ノ使ヒカ』ト。臣答ヘテ曰ク『然リ』ト。『汝何ヲ求ム』ト。曰ク『願ハクハ延年益寿ノ藥ヲ請フ』ト。神曰ク『汝ノ秦王ノ礼薄シ。觀ルヲ得ルモ取ルヲ得ズ』ト。即チ臣ヲ從ヘ東南蓬萊山ニ至リ、芝成ノ宮闕ヲ見ル。使者有リ、銅色ニシテ龜形、光上天ヲ照ラス。是ニ於テ臣再拜シ問ヒテ曰ク『宜シク何ヲ資トシテ以テ獻ズベキ』ト。海神曰ク『令名ノ男子若クシハ振女ト百工ノ事トヲ以テスレバ即チ之ヲ得ン』ト。秦皇大ニ悦ビ、振男女三千人ヲ遣リ、之ニ五穀種種百工ヲ資シテ行カシム。徐福平原広沢ヲ得テ止マリ王トナリテ来ラス。

この記事では、王となつた場所は平原広沢(広い野と沼のある地)とのみあるだけで全く不明である。『史記』には、これ以外に徐福に関するこれ以上詳細な記事はなく、『漢書』にも断片的な記述があるにとどまっている。

その後、彼の行方についての記述があるものは范曄(三九八—四四五)によつて書かれた『後漢書』がある。その東夷伝のうちの倭の章には次のように記されている。

(倭) 又夷洲及ヒ澶州有リ。伝ニ言フ、秦ノ始皇方士徐福ヲシテ童男女数千人ヲ將キテ海ニ入り、蓬萊ノ神仙ヲ求メシム。得ズ。徐福誅ヲ畏レテ敢テ還ラズ。遂ニ此ノ洲ニ止マル。世世相承ケテ数万家有リ。人民時ニ会稽ニ至リテ市ス。

しかしこの東洲・澶洲がどこにあるかはわからず、徐福の行方は結局不明である。

(二)

その後は行方の詮索よりも始皇帝の現世に対する強い執着のみが、帝の低い評価とともに伝承されたように思われる。

唐にはいると、最も人気のある詩人白楽天(七七二—八四六)は諷諭の詩である新楽府「海漫漫」において、秦の始皇帝と漢の武帝は徐福や文成の言葉を信じて不死の薬を蓬萊の島に求めさせたが、彼らの言っていることはほとんどでたらめであり、その証拠には今は二人の皇帝の墓に風が悲しげに吹くだけであると、次のように詠んでいる。

海漫漫 海ハ漫漫タリ

直下無底旁無辺 直下底無ク 旁辺無シ

雲濤煙浪最深処 雲濤煙浪 最モ深キ処

人伝中有三神山 人ハ伝フ 中ニ三神山有リ

山上多生不老藥 山上 多ク不死ノ藥ヲ生ジ

服之羽化為天仙 之ヲ服スレバ羽化シテ天仙ト為ルト

秦皇漢武信此語 秦皇漢武ハ此ノ語ヲ信ジ

方士年年采藥去 方士 年年藥ヲ采リニ去ル

蓬萊今古但聞名 蓬萊 今古但ダ名ヲ聞クノミ

煙水茫茫無覓処 煙水茫茫トシテ 覓ムル処無シ

海漫漫 海ハ漫漫タリ

風浩浩 風ハ浩浩タリ

眼穿不見蓬萊島 眼穿タルルモ蓬萊島ヲ見ズ

不見蓬萊不敢歸 蓬萊ヲ見ズンバ敢テ帰ラズ

童男艸女舟中老 童男艸女 舟中ニ老ユ

徐福文成多誑誕 徐福文成 誑誕多ク

上元太一虚祈禱 上元太一 虚シク祈禱ス

君看驪山頂上茂陵頭 君看ヨ 驪山ノ頂上茂陵ノ頭

畢竟悲風吹蔓草 畢竟 悲風蔓草ヲ吹ク

何況玄元聖祖五千言 何況 玄元聖祖ノ五千言

不言藥 不言藥

不言仙 仙ヲ言ハズ

不言白日昇青天 白日ニ青天ニ昇ルヲ言ハザルヲヤ

この詩には「仙ヲ求ムルヲ戒ムルナリ」という自注がついており、始皇帝の評価はますますさがったにちがいない。

(三)

宋代にはいると、大歴史家であり、唐宋八大家の一人である歐陽脩（一〇〇七—一〇七二）は「日本刀」という二十四句よりなる七言の詩の中で、日本人の祖先は徐福であり、秦の人民を詐って不老不死の薬を採りに日本に行き、久しく留っている間に一緒に連れて行った童男童女も老人になってしまった。また、その時各種の技術者もつれて行ったので、今に至るまで日本の工芸品は皆精巧である、次のように詠んでいる。（第九句より第十四句まで）

伝聞其国居大島 伝へ聞クニ 其ノ国ハ大島ニ居リ

土壤沃饒風俗好 土壤沃饒ニシテ風俗好シ

其先徐福詐秦民 其ノ先徐福秦ノ民ヲ詐リ

採菜淹留卅童老 菜ヲ採リ淹留シテ 卅童老ユ

百工五種与之居 百工ノ五種 之ト与ニ居リ

至今器玩皆精巧 今ニ至ルマデ器玩皆精巧ナリ

このように、いつの間にか徐福の渡航行は日本になったようだ。これは先に述べたように「後漢書」の倭の章に徐福の記事があることと関わりがあるかもしれない、また、後周・宋の高僧、義楚の撰『義楚六帖』の徐福日本（富士山）渡航説が関係しているのかもしれない。

いずれにしても日本渡航説は、中国では根強いものと思われる。その後約三百年、明の太祖洪武帝（一三六六—一三九八在位）は、入明した僧、絶海中津（一三三六—一四〇五）を召見して法要を問ひ、また日本の図を指さし、熊野の古祠について質問したところ、絶海は七絶を賦して答え、太祖もこれに対して同韻の御製の詩を賜った。

絶海中津

熊野峰前徐福祠 熊野峰前 徐福ノ祠

満山薬草雨余肥 満山ノ薬草 雨余ニ肥ユ

只今海上波壽穩 只今 海上波壽穩カナリ

万里好風須早帰 万里好風 須ラク早く帰ルベシ

太祖

熊野峰高血食祠 熊野峰高シ 血食ノ祠

松根琥珀也応肥 松根ノ琥珀 マタ応ニ肥ユベシ

当年徐福求仙薬 当年 徐福仙薬ヲ求ム

直到如今更不帰 直チニ到リ 如今更ニ帰ラズ

このことは絶海中津の伝記「仏智広照浄印翊聖国年譜」に載っているが、これによって徐福渡航の地がますます日本と結びついたばかりでなく、その地も紀州熊野というのが最も有力な伝承となったのである。

その伝承を裏づけるように、現在も紀勢本線新宮駅に近い新宮市徐福に「徐福の墓碑」という史跡があり、新宮市の指定文化財となつている。

(四)

日本における徐福渡来地についての伝説は前述の紀州熊野・富士山のほかに尾張熱田などもあり、そのような伝説を作り出させるほど徐福の話を有名にしたのは白楽天の詩「海漫漫」であつたと考えられる。

平安時代に『白氏文集』がよく読まれたことは『枕草子』に「書は文集……」と述べられている通りであり、「海漫漫」も『紫式部日記』の寛弘六年某月十一日の条に

「舟のうちんや老をばかこつらむ」といひたるを、聞きつけ給へるにや、大夫「徐福文成誑誕おほし」とうち誦し給ふ声も、さまざま、こよなういまめかしく見ゆ。

とあることが、よく証明している。

以下、「海漫漫」に基づいた代表的な作品のその箇所を挙げる。

彼の秦皇、漢武、或は童男卯女をつかはし、或は方士をして不死の薬を尋ね給ひしに、「蓬萊をみずは、いなや帰らじ」といって、徒らに船のうちにて老い、天水茫茫として、求むる事をえざりけん蓬萊洞の有様も、かくやありけんぞみえし。

〔平家物語〕卷七、竹生嶋詣

如何シテ蓬萊ニアル不死ノ薬ヲ求メテ、千秋万歳ノ宝祚ヲ保タント思ヒ給ヒケル処ニ、徐福・文成ト申シケル道士二人来テ、我不死ノ薬ヲ求ムル術ヲ知タル由申シケレバ、……蓬萊ノ嶋ヲソ求

メケル。海漫々トシテ辺ナシ。雲ノ浪・烟ノ波最深ク、風浩々トシテ不^{カタ}開、月華星彩蒼茫タリ。蓬萊ハ今モ古ヘモ只名ヲノミ聞ケル事ナレバ、天水茫茫トシテ求ムルニ所ナシ。蓬萊ヲ不^レ見否ヤ帰ラジト云ヒシ童男卯女ハ、徒ラニ舟ノ中ニヤ老イヌラン。徐福・文成其ノ偽リノ願レテ、責ノ我身ニ来ランズル事ヲ恐レテ、「是ハ何様竜神ノ成^ヌ崇^ツト寛^ユ候。皇帝自ラ海上ニ幸成リテ、竜神ヲ被^レ退治^ス候ヒナバ、蓬萊ノ嶋ヲナドカ尋^ネ得^ヌ事候ベキ。」ト申シケレバ、始皇ケニモトテ……。

〔太平記〕卷二十六、妙吉侍者事、秦皇、始皇帝事

これは「海漫漫」のみでなく「史記」淮南衡山王列伝にも拠つて

(五)

ところが江戸時代になると、「海漫漫」に基づいたものを作品の中に織りこむよりは、三神山の一つ、蓬萊山を日本に求める話が多くなつてくる。

これは「白氏文集」は、江戸時代の主流となつた庶民の文学としてはなじまず、徐福渡来伝説が流行した滑稽本・読本の素材になりやすかつたことが大きな原因の一つと考えられる。

風来山人(平賀源内、一七二六—一七七九)の『風流志道軒伝』と滝沢馬琴(一七六七—一八四八)の『椿説弓張月』を例として次に挙げる。

……宰相かぶりを打ちふりて、「昔秦の始皇の時、徐福といへる大山師が、蓬萊山に至りて、不死の薬を求めんとて、おこほにかけたためしも有れば、うかつには呑み込まれず。其上かゝる大

山をかりぬきにするは、紙代等も御時節がらには大そふなれば、出来兼山の子規、外に仕方是有るまじきや」と、冠をかたふけ思案あれば、浅之進すゝみ出で……。

〔風流志道軒伝〕巻之四

ここに記されている「蓬萊山」は文脈から富士山に擬していることは間違いない。

口の碑に伝へたるは、むかし異朝秦始皇帝、長生不老の仙薬を求め給ふこと、いと親切なりしかば、宋無忌といふもの奏すらく、扶桑の東に三ツの仙山あり。この山に仙人夥住みて、不老不死の薬を煉るといへり。方士徐福と呼ぶるもの、往に彼の仙山へ到りし事ありと申すよしを、聞えあげ奉りければ、始皇やがて徐福を召され、彼が申乞ふにまかして、大船十艘を造らし、男の童、女の童五百人と、金銀珠玉、五穀器材を齎らし、東海蓬萊の山へ遣して、仙丹を求めさし給ふに、徐福が船は、日本熊野といふ浦に着きぬ。時に日本孝靈天皇の御宇、徐福は辛うじて彼処までは来たれども、終に不死の薬をとり得ざれば、ふかく後難を怕れて、唐山に帰らず。その身はやがて熊野に留まり、従ひ来たりし女の童を、この嶋に捨ておき、又男の童等は、こゝより二十里ばかりあなたなる、嶋山に捨てられしが、徐福熊野にて身まかりしと聞こえければ……。

〔椿説弓張月〕巻之一

(A)

同じ江戸時代でも、徐福について異なつた面よりみていた者がいる。

徐福伝説のある紀州の藩儒仁井田南陽(好古、「毛詩」の大家。君命により「紀伊統風土記」の編纂も行っている。一七七〇—一八四八)である。

その「楽古堂文集」所載の「秦徐福碑記」をみると『椿説弓張月』と同じように、孝靈天皇の時に熊野に渡来したという伝承には拠っているが、その動機などについて、徐福は秦の国府が乱れ、人民がしいたげられ時に、その毒手を逃れるために方士となつたのであるが、それでも身の危険を感じて、三神山の説を進言し、その薬国へ行こうと謀つたのであるとしている。それに続けて、乱世には椗に乗って海外に出ようと言つた孔子の精神を實行したのであり、秦の天下となつたら東海の藻屑とならうと高言しただけの魯仲連とは天と地との違いがあると述べ、さらに秦朝の何億の人も徐福以上の高潔な精神の持ち主はいない、それを後世の者たちは理解せず、単なるほら吹きだと悪口をいうのは愚かなことであると、次のように最大限に称揚している。

嗚呼、徐生秦政肆虐ノ日ニ当たり、其ノ毒手ヲ避ケントシテ、身ヲ方士に通ル。猶ホ其ノ免レザルヲ度ルヤ、三神ノ説ヲ進メ、以テ楽國ニ帰スルノ謀ヲ為ス。亦タ夙ニ東方ニ君子ノ国ナル者有ルヲ知ルカ。孔子曰ク「椗ニ乗リテ海ニ浮バン」ト。徐生ハ其レ孔子ノ意ヲ成ス者カ。戦國ノ時、魯仲連アル者有リ、抗言シテ曰ク「秦若シ帝ト為ラバ、則チ連ハ東海ヲ踏ミテ死スル有ルノミ。吾之ガ民ト為ルニ忍ビズ」ト。天下其ノ節ヲ高シトシ、其ノ言ヲ快シトス。然レドモ連ハ唯ダ此ヲ言フノミ。諸ヲ生ノ奔逸絶塵ニ比ブレバ、則チ霄壤ナリ。然ラバ則チ秦廷ノ億万ノ人ヲ萃ゲ、其ノ高節偉行、孰レカ生ノ上ニ出ヅル者有ランヤ。惜シ、後ノ論ズ

ル者、其ノ事ヲ詳カニスル能ハズシテ、方士ヲ以テ之ヲ視、荒唐ヲ以テ之ヲ譏ル。吁、愚ナルコト太甚シ。

〔楽古堂文集〕卷之四

伝承の地が紀州であること、主家である紀伊徳川家の初代藩主徳川頼宣（一六〇二—一六七二）が徐福の墓碑を建てようとの企てがあったこと、藩主の命によつての撰文であつたことなどが多少影響したかもしれないが、南陽がこのようなみかたをしていることは興味深い。

(四)

以上、徐福についてさまざまなことを記してきたが、彼の眞の姿はなぞのままである。しかし『史記』に述べられ、白楽天に詠まれ、それらが日本の文学に影響したことは事実である。また、熊野渡来説は荒唐無稽の伝説かもしれないが、それについて絶海と太祖の間に詩の応酬があつたことも事実であり、この虚実の間にあるものはないのであろうか。

注(1) 「日本刀」の作者は、一説に司馬光（一〇一九—一〇八六）といわれている。

(2) 熊野が蓬萊山に擬せられたことについて荻生徂徠は『南留別志』において「熊野を蓬萊といへるは、三の御山といふよりなるべし……。」と、熊野三山が三神山に擬せられる俗説であるとしている。

(3) 『論語』公冶長第五に「子曰ク、道行ナハレズ。桴ニ乗リテ海ニ浮バン。我ニ従フ者ハ其レ由ナルカ」とある。

受贈雑誌リスト(2)

- 紀要 第21号(大妻女子大学)
比較文学年誌 第25号(早稲田大学比較文学研究室)
文経論叢 第24巻第3号(弘前大学人文学部)
演劇學 第30号(早稲田大学演劇学会)
紀要 文学科 第63・64号(中央大学文学部)
聖心女子大学論叢 第72集(聖心女子大学)
王朝文学史稿 第15号(王朝文学史研究会)
日本文學誌要 40(法政大学国文学会)
群馬県立女子大学紀要 第9号(群馬県立女子大学)
群馬県立女子大学国文学研究 第9号(群馬県立女子大学国語国文学会)
国文学踏査 通刊15号(大正大学国文学会)
富士大学紀要 第21巻第2号(富士大学学術研究会)
相愛国文 第2号(相愛女子短期大学国文学研究室)
語学・文学研究 第18号(金沢大学教育学部国語国文学会)
文藝と批評 第6巻第9号(文芸と批評の会)
北星論集 第26号(北星学園大学)
東京成徳国文 第12号(東京成徳短期大学国語国文学会)
成蹊国文 第22号(成蹊大学文学部日本文学研究室)
国語国文学会誌 30(福岡教育大学国語国文学会)